〈共同研究〉
「日韓未来平和交流事業の学際的研究—龍谷大学所蔵の安重根の「遺墨」「丹波マンガン記念館」に代表される歴史・文化資産の調査研究とその有効利用—」

安重根の遺墨と和解に向けての越境的対話

李　洙任（Lee Soo im）*

はじめに

社会科学研究所共同研究「日韓未来平和交流事業の学際的研究—龍谷大学所蔵の安重根の『遺墨』『丹波マンガン記念館』に代表される歴史・文化資産の調査研究とその有効利用—」は、2013年4月にその研究活動を開始し、3年間のプロジェクトを終えた。私たち共同研究者は、研究成果を市民活動と連動させるため、専門分野の枠を超えて多様な研究者たちや日韓関係研究に従事する研究センターや機関、そしてメディア関係者と連携をとってきた。このような人的ネットワークの広がりと市民社会への発信は、共同研究者たちに複眼的に研究課題に取り組む視点を与えただけでなく、机上の学問で終わらせまいとする研究者の内発的動機を高めるのに役立った。このことは、なによりも安重根という人物の影響力に負うところが大きい。

本共同研究の開始をきっかけに、2013年5月に「安重根東洋平和研究センター」を設置し、センターとしての活動のスタートを切った。国内外で活躍する研究者や市民活動家の参加によって、開催された学術会議に多くの一般市民が参加した。これも安重根という人物の壮大な東洋平和思想と独立運動家としての気概に負うところが大きい。日本では、安重根（1879年9月2日-1910年3月26日）といえば初代内閣総理大臣で、初代韓国統監でもあった伊藤博文（1841年10月16日-1909年10月26日）を暗殺した人物として知られている。日本で一気に安重根に関心が高まったのは、2014年1月19日、中国黒龍江省のハルビン駅（安が伊藤を撃った場所）に安重根記念館が開設されたときである。ハルビン駅に記念碑が設置されることを知った菅義偉官房長官は安重根を「暗殺者」や「テロリスト」と呼び、不快感を露にした。メディアは菅の発言に一挙に反応し、日本社会で「安重根はテロリスト」というイメージが広がった。当然のごとく一般の日本人もその影響を受け、安重根は嫌韓、嫌中の渦の中で象徴的な存在になってしまった。

安重根を「暗殺者」や「テロリスト」という言葉で切り捨てる行為は、緊張した隣国の関係に有益なものは何ら生み出せない。今必要なことは、安重根と伊藤博文を取り巻いた政治的、経済的、社会的要因を冷静かつ客観的に判断し、和解に向けての関係性を構築するためのヒントを探し出すことである。中国ハルビン駅に安重根の記念館が開設されたということは、中国と韓国の密接な関係が構築されつつあることを示唆する。安重根は、韓国独立だけでなく、中国と日本、そしてその他のアジア諸国がそれぞれ独立性を守りながら共栄するという東洋平和を成し遂げるのが終生の事業と信じた人物であった。本稿では、安重根が提唱した東洋平和論に思いを馳せながら、和解に向けての越境的対話の実効性と市民活動の事例を考察

*本研究プロジェクト代表、龍谷大学社会科学研究所付属安重根東洋平和研究センター長。専門は英語教育学、異文化ビジネスコミュニケーション、移民学。

する。

日本仏教の戦争責任

安重根は、敬虔なカソリック教徒だった（洗礼名：トーマス）。安重根は韓国では殉国の英雄とされているが、その宗教観から安重根という人物を国粋主義者や民族主義者という枠内で説明するには無理がある。また安重根を語る上で、植民地支配下に置いた満州、朝鮮、そして台湾に渡った日本仏教の僧侶の存在を無視することはできない。日本仏教は植民地支配を肯定し、天皇国家体制に基づく教義や国の軍事化、そして植民地支配政策に賛同し、多くの僧侶を派遣した。すなわち、日本を戦争への道に歩ませる環境を是とした点で日本仏教には戦争責任がある。自身が真宗大谷派僧侶である菱木政晴は、浄土真宗は、「現人神」の信仰を認め、戦没者の顕彰を儀礼化したように、国家神道の一翼をにない、海外侵略を美化する役割を負っていたと告発し、靖国神社アジア訴訟原告団、小泉靖国参拝訴訟原告団などの日本政府への訴訟活動に参加した[1)]。

浄土真宗の開祖である親鸞（1173-1263）は世俗的な「恩」思想を説いていない。親鸞の曾孫である覚如（1270-1351）の時代までの浄土真宗の教義は、世俗的な国王への「恩」思想とは無縁だった。山本（2010：75）によると、覚如における「恩」思想では父母恩や国王恩についてはふれられなかったにもかかわらず、覚如の子である存覚（1290-1373）の代になって明確に父母と国王の「恩」が強調されるようになった[2)]。

明治時代に入ると日本仏教は、対内的には公定イデオロギーとなった国家神道に既成の立場を脅かされるが、対外的には強勢を伸ばす戦略をとり始めた。他の宗派に比べこの流れにいち早く乗りだしたのが真宗大谷派である。真宗大谷派にとって海外進出は、日本国内での狭められた位置を回復し、海外への新しい布教圏・布教権を確保するためであった（金、2011：44）[3)]。韓国併合前に既に東本願寺釜山別院が設置され（1877年に最初の布教所が設置され、1878年に真宗大谷派東本願寺釜山別院と名称が変更）、本格的な布教活動が始まった。

その積極的な海外進出の背景には檀家制度に安住し、幕藩権力の一役を担っていた状況が急激に変化し、従来の立場が脅かされるようになった国内事情にあった（金、前掲書：44）。朝鮮では布教の主なる対象は日本人であったが、多様な形で朝鮮人とも関係を有しながら布教を行っている（金、前掲書：45）。また台湾に入植した僧侶は、日本人への布教活動を中心に植民地支配下の日本人コミュニティにおいて重要な役割を果たした（松金、2006）[4)]。日本仏教は、江戸時代の終わりに日米和親条約が締結され欧米諸国との本格的な交流や交易が始まった時代からキリスト教に対抗するために組織化を進め、宗教政策をとり始めた。西本願寺教団はキリスト教の流入を恐れ、当時の宗主広如は、長州出身の僧侶である月性を重用し、「護国」意識や西洋に対する夷狄思想が加わった「防邪」意識を強めていった（山本、前掲書：77）。東西両本願寺は倒幕尊王派に接近し、朝廷とも関係を深めたことから天皇への「報恩」思想は教義の中で正当化されていったのではないかと考えられる。ちなみに伊藤博文は長州藩出身の尊王攘夷の志士として活躍した人物である。これらのことから時代の潮流に日本仏教は本来の教義とは反する政治的要素を強め、大乗仏教の精神から乖離していった。また国に貢献するために僧侶たちは、入植した日本人や現地人に「上に仁慈なる聖天子を戴き国威海外に輝きつゝある大日本帝国臣民として泰平の中に其生を営みつゝあるお互の幸福は真に衷心より喜び欣ばねばならぬ」として「天皇の恩」への報恩としての国家への奉公の重要性を説いている（山本、前掲書：79）。軍国主義はこのように宗教を利用し、また宗教は軍国主義を基に国民に愛国心を強要した。このような史実は日本人にあまり知られていない。戦争責任に目を伏せたままの日本仏教の姿がそこにはある。人々を戦争に駆り立て、植民地支配を正当化した日本仏教と戦争責任は「東洋平和」を考える意味で重要なテーマとなる。また、山本が問題提起する朝鮮教誨師と戦争国家との関係性は安重根の遺墨の存在からも深く垣間見られる。

大学の倫理責任

東洋平和研究においてもう一つの重要なテーマは、大学の倫理責任である。龍谷大学は、浄土真宗本願寺派（西本願寺）関係の学校のうち、最高学府たるポジションを占める。江戸時代初頭の創立期から宗門の宗学研讃・僧侶養成の学校として、紆余曲折を辿り発展してきたが、今や10の学部と９つの研究科がある総合大学となった。その建学の精神には親鸞の教えが脈々と受け継がれている。2009年に龍谷大学創立370周年記念の一環として、学徒出陣の大規模な調査が行われた。その過程で、志願や徴兵で出征した在校生・卒業生や教職員らが多いことが分かり、歴史研究として名簿の作成が着手されたのである。民間人の戦災死を含んだ300人の「生きた証」が著に残されている。戦死者の家族への聞き取り調査で、家族が「戦争には行くな」と泣いて懇願しても戦地に積極的に出向く学生が多くいたことが分かった[5]。

学生たちの愛国心を高揚させた要因として教団の天皇への「報恩」があったことは否定できない。責任倫理を問われるのは政治の舞台だけではなく、和解から隣国との共存に発展させるには教団や教育機関を含む社会全体が歴史と向き合う姿勢が必要である。

企業の戦争における倫理責任に関して、日本とドイツの間には大きな開きがある。またヨーロッパの大学も戦争における倫理責任を明確に果たしてきた点で日本は大きく後れをとっている（重本、2012：120)。他国と歴史認識を一致させる前に植民地支配の意味を正確に把握できるよう、複眼的に歴史教育を行う責任をすべての教育機関は負う。その中で龍谷大学のような宗教系大学は、国家主導型の教育から距離を置きながら重要な役割を果たせる立場にある。

テッサ・モリス＝スズキ（2015)[6]は、今日の日本を取り巻く政治的かつ経済的環境は第二次世界大戦前のそれと類似していることを指摘する。また牧野（2014)[7]は、アンナ・ハーレントの「悪の凡庸さ」を引用し、思考停止状態に陥りつつある今日の日本社会と政治に強い危機感を覚え、大規模に「悪の凡庸さ」が再び繰り返されるかもしれないと警鐘を鳴らす。政治家の質的劣化や大企業の国際力低下に喘ぐ日本で、私たち一般の市民は「悪の凡庸さ」に安易に染まりやすい環境にあり、至って脆弱な状況にある。

遺墨を介しての日本人との越境的対話

1995年に安重根と日本人看守たちの関係をドキュメンタリーとして紹介したテレビ番組があった。テレビ朝日の「驚きももの木二十世紀」、サブタイトルは「伊藤博文を撃った男」[8]である。本番組には、数名のゲストやコメンテーターが出演しているが、その一人がノンフィクション作家斉藤充功[9]である。斉藤は、旅順監獄で日本人と交流をもった人物であると知って安重根に関心をもち、『伊藤博文を撃った男―革命義士安重根の原像』（1994年、時事通信社）を執筆した。また、VTRで登場した佐木隆三[10]は、「どのような人物であったのか、どのような大義名分でこのようなテロ行為を行ったのかという疑問に日本人はほとんど知ろうとする努力をしてこなかった」と語る。もう一人のコメンテーター、亜細亜大学名誉教授中野泰雄は、「真実というものはそのままには死なない」と語り、中野の発言に続いて龍谷大学が所蔵する安重根の遺墨三幅が画面に大きく映し出され、「現状を放置しておくわけにはいかない」と視聴者に訴える。「遺墨は安重根の痛切な叫びの痕跡である」と遺墨の存在を重視し、遺墨から安重根という人物像に迫ろうとする番組の意図が明確にかつ効果的に視聴者に伝わる。

本番組は、当時の政治的背景を簡潔に視聴者に説明するという構成がうまくできており、テレビ番組制作者の力量をも感じさせる。本番組では伊藤博文は以下のように説明されている。「大都会ハルビン駅、一番線プラットフォームが伊藤博文の終焉の舞台となった。伊藤は四度に亘って首相に任命された人物で明治の元勲とも呼ばれた。伊藤は、富国強兵を推進し、日清戦争、日露戦争と大日本帝国の礎を作った人物である」と。

安重根による伊藤暗殺によって日本の植民地支配は早められたと理解する日本人は多い。しかし、本番組は伊藤の知られざる顔を見せる。当時政界

から一線を引き、隠居生活をしていた伊藤だったが、歴然として強い政治力を維持していた。伊藤は、当時の外務大臣小村寿太郎と首相桂太郎の朝鮮に対する植民地支配案「韓国併合」に許可を与え、外交交渉のために「最後のご奉公」と称し大陸に乗り入んだ。伊藤の本当の目的は植民地支配案への理解を求め、満鉄の権益を日本とロシアで分け合うことだったのである。

1909年10月26日、伊藤博文は安重根によって暗殺された。ハルビン日本総領事館では、溝淵孝雄（検察官）、園木末喜（通訳）によって、安重根に対する取調べが始まる。すると安重根は、一切のよどみなく伊藤暗殺の15の理由を挙げ、最後に「私のおもっていることを天皇にすぐ上奏してください。東洋の危機が迫っている」と二人に訴えた。その後、安重根は旅順監獄へ移送された。旅順監獄は異様な緊張に包まれ、看守たちは当初何様なのかと怒りと好奇心で安重根を見た。しかし、冷静かつ春風のような堂々とした姿勢に接すると、奇妙な心境になった。単純なテロではないと思うようになったのである。

検察官である溝淵は「東洋とはどこを指すのか？」と問うと、安は「亜細亜州を指します。日本、韓国、中国、シャム、ビルマがここに含まれ、各国が自主独立することが東洋平和であります」と答えた。自主独立を基本理念とし、東アジア地域運命共同体を確立する。それが安重根の東洋平和論であった。大日本帝国も同じく大東亜共和論を振りかざし朝鮮を防波堤にして東洋平和を維持すると主張していた。そして、日清戦争は韓国の独立を図るためと戦争を正当化していた。本番組では、二つの義がぶつかる瞬間を効果的に説明しているが、安重根の東洋平和思想に軍盃を与えているかのようである。安重根の思想が広まるのを恐れた小村寿太郎は電報を打電し、裁判が始まる前に極刑を指示するという異例の通達を出した。コメンテーターの斎藤充功は、「日本政府が恐れた理由は、安重根が大変な人物であることを認識し、国家にとって恐怖となる、第二の安重根、第三の安重根が現れる可能性を懸念したこと。それが裁判前の極刑指示に繋がった」と語った。

本番組は、多様な視点から説明を試みるという心のゆとりを感じさせるのである。コメンテーターの漫画家黒鉄ヒロシは、「被害者は現在進行形で記憶するが加害者は過去完了形で記憶しがちである」とし、「これを逆にすれば品のよい関係が生まれるのではないか」、「安重根は、ロマンティックな人物」と締めくくった。このような番組が誕生したのには社会的・経済的背景があった。この時代は「相手の立場になって物事を見る」というゆとりを感じさせる日韓関係が政治レベルで存在していたことがわかる。

1993年には、慰安婦関係調査結果に関する河野洋平内閣官房長官談話（河野談話）日本の敗戦50周年にあたる1995年８月15日には、「戦後50周年の終戦記念日にあたって」という村山富市内閣総理大臣談話（村山談話）が発表された。日本政府により閣議決定された歴史認識は、日韓関係を正常化させるため、黒鉄ヒロシがいう「品のよい」ステップを踏み出したということになる。村山談話では「わが国は、遠くない過去の一時期、国策を誤り、戦争への道を歩んで国民を存亡の危機に陥れ、植民地支配と侵略によって、多くの国々、とりわけアジア諸国の人々に対して多大の損害と苦痛を与えました。」と謝罪と戦争責任の主体を「わが国」とした点で責任ある談話となった。

2015年に発表された安倍晋三内閣総理大臣の談話には世界中が注目し、とりわけ従軍慰安婦問題はどのように言及されるかが最大の関心事となった。８月14日、安倍首相は戦後70年「談話」を発表し、閣議決定された。その内容は、安重根の『東洋平和論』の歴史的・現代的考察に取り組む当センターにとって看過できないものであり、これが日本政府の公式の歴史認識であることに強い抗議の意を表明した[11]。安倍談話において、台湾や朝鮮の植民地化、植民地支配については誤りを一切認めていない。逆に、朝鮮の植民地化を決定的にした日露戦争を一面的に美化・正当化している。むしろ、植民地支配に対して優越感が感じ取れる。責任の主体が不明瞭に描かれた安倍談話の決定的な特徴は、「植民地支配は19世紀の経済的要因が最大の原因であり、日本も欧米諸国に負けずにその流れに参加しただけ」という考えが読み取れることである。同政権の菅官房長官が安重根

を「暗殺者」や「テロリスト」呼ぶ理由がそこにあり、真摯な反省は感じ取れないのである。

遺墨から読み取れるもの

旅順監獄で、安重根は、100人ほどいた日本人の看守たちとたった5ヶ月という短い間に信頼関係を構築し、彼らの生き方までも影響を与えた。彼らは、いわゆる越境的な対話を可能にした人たちである。安重根に筆、墨、紙などを提供するなどという看守の寛容な姿勢があった。日本人看守に見守られながら執筆した『東洋平和論』は現代に通用するものがあり、欧米諸国の支配に対抗するには、日本、朝鮮、中国が協力し、共同体を形成し対抗策をとるというものであった。この考えはEU（ヨーロッパ連合）の思想より100年以上も先駆けた「地域運命共同体」の構想である。100年以上も前に、また31歳という若者がその構想を抱き、具現化しようとした事実は驚きに値し、国防の観点が独りよがりでないことにその特徴がある。

その崇高な思想を掲げた弱冠31歳の若者の存在を知ることで、朝鮮に対して強い蔑視感をもつ日本人を一蹴できるほどの力強さをも感じるのである。むしろ安重根の存在が危険と感じ、生かしておいたら第二の、また第三の安重根のような人物が出てくるのを恐れた日本政府は、安重根を裁く法廷を公開せず極刑を急いだ。これこそ日本の歴史の恥じる部分なのである。安重根裁判の管轄権の根拠とした韓国保護条約について、戸塚はその条約は捏造された無効であるとし、裁判は不当そのものであると立論した（戸塚、2010：311-336）[12]。

これらの検証は、日韓関係を正常化する過程で必要である。1965年の日韓正常化協定ですべて解決済みとするのではなく、それを基本としながら共に歴史を再検証し、教育での日韓関係正常化を図り、社会へ還元していく作業が今必要とされている。

安重根は、極刑を恐れず軍人の処刑方法である銃殺刑を望んだが、軍人としての名誉は剝奪され犯罪者として絞首刑に処された。死刑囚にも人権は担保されており、処刑後その遺体は家族のもとへ返され、死刑に関する詳細な記録が残されるというのが法律に沿った方法である。しかし、安重根の遺体は家族のもとに返されず、埋葬場所さえも知らせなかったことなど死者の人権を無視する日本政府の判断は決して誇れるものではない。

四本目の遺墨―「独立」

龍谷大学が所蔵している安重根の遺墨三幅に託したメッセージの効力は多くの人たちの心を動かした。そして、2015年10月22日、既存の三幅に加え、新たに遺墨「独立」（額装：一面）が図書館資料として、宗教法人願舩寺（がんせんじ）より龍谷大学に寄託されたのである。四本目の安重根の遺墨は、安重根の信念を日本社会だけでなく世界に伝えようとしているかのようで、戸塚（2014）[13]の言葉を借りると「100年の眠りからさめた遺墨」なのである。収監時代の安重根と看守たちはどのように友情を育み信頼関係を育てていけたのであろうか？伊藤博文を射殺した人間であるから看守たちは憎悪と怒りの感情で安重根を迎え入れたに違いない。厳しい尋問が日夜行われる中で、凛とした姿勢を崩さない安重根はただものではないと認識した看守たちと安重根は、国境や思想を越えて友情関係を形成できた。今日のコミュニケーション力は言語に頼る部分が多くなりがちで、言葉そのものが暴力的に使われるヘイトスピーチが深刻な社会問題になっている。当時の日本人看守たちと安重根との共通言語は筆記による漢語だけで、コミュニケーションは非言語のものに頼るものであったと理解できる。ということは、彼らは互いに言語に頼らず相手の本質を読み取る力を備えていたと考えられ、史実に一光を放つことができる。

宗教法人願舩寺より寄託を受けた「獨（独）立」は、既存の三幅の遺墨とは異なる意味合いをもつものである。「獨立」の横に、「庚戌（こうじゅつ）（1910年）二月　於旅順獄中　大韓國人　安重根書」と書かれ、安重根の手形が押されている。今回の遺墨は他のものと異なり、祖国と民族の独立を願う強い意思がうかがえる「独立」という文字が書かれている。この遺墨を譲り受けた旅

順監獄の看守は、実家だった広島県安芸高田市の願舩寺に遺墨を持ち帰り、所蔵してきたが、近年は劣化が進んでいた。龍谷大学が所蔵することによって、保管の点からも劣化を防ぐ環境に額装は置かれるようになった。

龍谷大学が所蔵する既存の三幅の遺墨は、安重根から浄土真宗の教誨師であった僧侶が譲りうけたものとされている。これらの遺墨は、本願寺旅順出張所勤務の津田海純師（浄心寺出生）が、秘かに日本へ持ち帰ったものである。津田は、安重根が旅順監獄に収監され、処刑された1910年３月26日当時本願寺派派遣関東別院（大連に所在）旅順出張所監獄教誨師補の立場にあり、旅順監獄で本願寺派二代目の教誨師長岡覚性の助手を務めていたことから、安重根と接触したものと思われる[14]。浄心寺の津田雅行現住職は、「韓国併合」100年市民ネットワーク2012年10月27日、「日本と朝鮮半島との和解の道をさぐる！」ワークショップで、新設の『龍谷ミュージアム』に寄託した遺墨の常設展示を強く要望している。所蔵したままでは「死蔵」となり、貴重な教育資料を無駄にしていることになる。朝鮮半島から持ち帰り、大切に所蔵していた津田海純の意思を尊重するためにもこの貴重資料を有効利用する責任を龍谷大学は負う。

2015年11月７日に安重根東洋平和研究センター、ソウル安重根祈念館共催の国際学術会議が開催された。出席した日韓中の研究者が龍谷大学図書館を訪れ、遺墨四点を見学した。寄託を受けた龍谷大学は、安重根の評価をめぐり日韓両政府が応酬する中、「安重根の行動と思想を通じて日韓史を考えるきっかけにしたい」とメディアに語っており[15]、この大切なミッションは教育機関として龍谷大学の独自性を強調できる。

越境的対話の市民による試み

21世紀を再び戦火に喘ぐ時代にしないためにも、政治的影響を受けない歴史的リテラシーが必要とされ、「自分の立場だけを主張するのではなく、他者をも尊重する」という共生の観点からの歴史教育を模索する必要がある。フランスがドイツの宿敵から同盟国に変わった過程を理解することは、日本と韓国そして他のアジア諸国との関係性を正常化する上で役立つ。両国の歴史学者の定例的な話し合いを経て、また体制の違いを超えて国際理解を推進してきた。ポーランドのような政治的イデオロギーが異なる国も積極的に参加し、異なる政治的前提条件の中で、数十年に及ぶ共同作業を通して相互に尊重し合う環境が整備されたのである。その成果がドイツとフランスが着手した共通の歴史教科書である[16]。日本と韓国の間でも政治に惑わされずに個人の努力を積み上げながら和解に向けての越境的対話を市民レベルで実践していた人たちがいる。

１．安重根と友情を育んだ憲兵千葉十七

安重根が残した遺墨は、相手の立場を思いやって孔子や論語の言葉を選んだものが多い。例えば、前述の強い友情で結ばれた日本人看守である千葉十七には「為国献身軍人本分」「国の為身を捧げることは、軍人の本分（本来の役割）である。」という書を書き譲った。安重根生誕100周年の1979年、それまで千葉並びに遺族により大切にされてきたこの書は、祖国に返還されている。

毎年９月に大林寺（宮城県栗原市）で安重根と千葉十七の合同法要が開催されている。この法要に参加する安重根崇募会が主催で韓国側からは毎年約30名が参加する。2015年の法要は９月13日に開催され、大林寺住職斉藤泰彦が合同法要を行い、午後には栗原市栗駒史談会により日韓親善交流会が開催された。この法要には駐仙台韓国総領事梁桂和が参加した。駐仙台韓国総領事館は1966年に領事館として開設され、1980年総領事館に昇格し今日に至り、日本の東北地方（宮城・青森・岩手・秋田・山形・福島）の６県を管轄している。管轄地域には10,000人の韓国人が居住しており、５県（宮城・青森・岩手・秋田・山形）に、それぞれ“ソウル事務所”が設置されている。仙台市と光州広域市間の姉妹締結をはじめ両国の16ヶ所の地方自治体間で交流の協定を締結し、６つの日韓親善協会と６つの日韓議員連盟が結成されている[17]。このように日韓交流を物語る点で、地方都市の活躍は重視するに値する。長期の時間をかけ

て信頼関係を築きあげる尽力が政治の分野においても重要であり、大林寺の安重根と千葉十七の合同法要は越境的な国際交流機会となっている。

2．市民による安重根追慕

大林寺での法要には日本人も参加しているが、毎年参加する日本の一人に寺下武がいる。2009年12月から2010年３月、寺下は、安重根の没後100年を記念し、日本から韓国2500キロメートルの徒歩巡礼を決行し、日韓交流を実践した人物である。寺下は、元生協職員であったが、20歳のときに韓国に関する書を読み、韓国の悲しい歴史的事実を知った。韓国に対しては罪の意識からかなぜか敷居が高く感じていた寺下は、安重根の存在を知るようになる。寺下は、安重根について理解を深めると安重根を韓国だけの英雄ではない、世界の英雄であると高く評価するに到った。安重根に対する畏敬の念は止まず、安重根の平和に対する意思を実践しようと、仕事を辞めてまで日本から韓国への徒歩巡礼を決意した[18]。

2009年12月25日に大林寺を出発し、翌年の２月中旬までに日本12県1800キロメートル余りを歩き、釜山港から韓国入り。晋州、順天、広州、天安を経て、３月22日にソウルに到着した。韓国巡礼中には安重根の平和精神をたたえ、旧日本軍慰安婦被害女性らが集まり暮らす京畿道・広州の「ナヌムの家」なども訪れた。そして、日本生活協同組合と交流がある韓国のiCOOP生協は、寺下の釜山到着を祝う歓迎会を開催した。寺下の志に共感し、朝鮮半島縦断に同行を決意した韓国の青年は、「安重根義士の殉国100年を追慕し、韓国と日本を自分の足でつなぐと同時に、世界の平和を祈りたいという思いで徒歩巡礼に乗り出した、日本人の志が格好良く思えた」と同行の理由を話している。安重根が重要人物であることは学校で習ったが、教科書に出ている断片的な情報が知識のすべてだった。そんななか、安重根をしのび、退職金まで徒歩巡礼に費やす日本人の決心に驚いたという[19]。寺下は「安重根は韓国だけの英雄ではない、世界の英雄である」と安重根の壮大な思想に感銘し、韓国との交流を市民レベルで継続している。

3．浄土真宗本願寺派住職殿平善彦による強制連行犠牲者遺骨返還事業

歳月をかけて日韓交流に命を捧げる浄土真宗本願寺派住職がいる。殿平善彦である。殿平は、2015年９月11日から21日にかけて、東アジアに新たな和解と友情の時代「強制連行犠牲者遺骨返還事業」を実施し、安重根東洋平和研究センターも支援団体として事業に加わった[20]。

アジア太平洋戦争の戦場で、空襲で、あるいは労働を強いられて、多くの人々が死に至らしめられた。日本人310万人、アジアの人々は2000万人以上が命を失ったと言われている。今も無数の遺骨が異郷の地に残されている北海道には、ダム工事、飛行場建設あるいは炭鉱で労働を強いられた朝鮮人、中国人、日本人のタコ部屋労働者の遺骨が仏教寺院の埋葬地に残されている。1970年代から北海道で始まった発掘と調査で掘り出された遺骨は、いつか故郷に帰る日を待ち、寺院の納骨堂に安置され続けていた。戦争から70年を経た2015年、朝鮮人、中国人、日本人のタコ部屋労働犠牲者を追悼しつつ、韓国出身犠牲者の遺骨を韓国の遺族に、故郷に奉持することになった。

1938年から43年まで、北海道朱鞠内では雨竜ダム・名雨線鉄道工事が行われ、200人以上の労働者が犠牲になった。朱鞠内湖は雨竜ダムの堰堤にせき止められてできた人造湖で、戦争中に朝鮮半島から強制的に連行されてきた朝鮮人と日本人のタコ部屋労働者の命の痕跡だった。重労働と僅かな食事、逃亡者への見せしめのリンチが横行し、死者の存在は知られないまま共同墓地に埋められていた。また、飛行場建設は1943年から45年にかけて行われた。戦況の悪化に伴い、いつアメリカが北から攻めて来るかもわからない状況の中、ソ連軍の南下にも備えるために防衛網の建設が急がれ、オホーツク沿岸に飛行場を急造した。根室や女満別、樺太にも造られた。そして浅茅野台地には二つの飛行場が建設された。浅茅野飛行場を発注したのは旧日本陸軍である。実際に工事を請け負ったのは北海道内の土建業者で、鉄道工業、菅原組、川口組、丹野組など。労働者は日本人も、そして囚人もいたが、ほとんどは朝鮮半島から連行された朝鮮人だった[21]。

その遺骨を発掘する運動を通して、宗教人として死者の魂を故郷に戻したいという殿平は、2014年ソウル安重根祈念館開催の国際学術会議で、「旧浅茅野（きゅうあさじの）飛行場建設犠牲者の遺骨発掘調査」について語った。その会議に出席した多くの韓国人の胸を打ち、殿平のような日韓関係に尽力を注いだ日本人が存在することを理解することで両国に自信を与えることができる。

2004年以来、日本と韓国の政府間で遺骨返還の協議が続けられてきたが、企業によって労働を強いられた人々の遺骨は、日韓政府の間では返還できずにいた。殿平は、2015年９月「強制連行犠牲者遺骨返還事業」を実施した。これは、日本と韓国の市民と宗教者が、思想、信条、宗教の違いを越えて遺骨を待ちわびる遺族に届けようとするものであった。遺骨奉還は、朝鮮から連れてこられた道順を逆にたどって、北海道・東京・関西・下関・釜山・ソウルそして望郷の丘へと犠牲者が悲哀の思いで渡った道を辿る。以下は主催者と支援に関わった団体名である。

強制労働犠牲者追悼・遺骨奉還委員会
共同代表　殿平善彦
　　（浄土真宗本願寺派一乗寺住職）
　　鄭炳浩　（韓国漢陽大学教授）

構成団体
日本側　強制連行・強制労働犠牲者を考える北海道フォーラム
　　東アジア共同ワークショップ
　　遺骨奉還を願う宗教者の会
　　NPO法人東アジア市民ネットワーク
韓国側　NPO法人平和の踏み石
支援団体　浄土真宗本願寺札幌別院
　　浄土真宗本願寺派常光寺
　　龍谷大学社会科学研究所付属安重根東洋平和研究センター
　　北海道宗教者平和協議会
ベルリン女の会　Japanische Fraueninitiative Berlin

捧持されたご遺骨は以下である。また次頁に遺骨奉還のスケジュールを記す。

本願寺札幌別院に残されてきたご遺骨のうち韓国出身者分　71体　骨箱１個
美唄常光寺に安置されてきた韓国出身者ご遺骨　６体　骨箱６個
朱鞠内雨竜ダム建設工事犠牲者から　２体　棺箱２個
朱鞠内雨竜ダム建設工事犠牲者（韓国・忠北大から参加）　２体
日本陸軍浅茅野飛行場建設犠牲者　39体　棺箱10個、骨瓶29個
合　計　120体　骨箱36個、棺箱12個

おわりに

安重根は、自身の自叙伝「安応七歴史」を1910年１月初旬の某日から執筆し始め、３月18日ごろには脱稿状態にかかり、続いてすぐに「東洋平和論」の執筆に着手した。しかし、10日足らずで死刑が執行され（26日）、未完に終わっている。彼が抱いた「東洋平和論」はどのような平和論であったのかを解明することは現在の東アジア地域の安定と平和維持を考える点で非常に重要な作業である。安重根は、東アジアの平和を実現するには、東アジア３国、日中韓が協力し、連携すべきであると訴え、共同軍隊の配備や３国の共通通貨を発行するための銀行を設置する案など、その構想は現在のヨーロッパ連合（EU）を彷彿とさせるものであった。東アジア地域の市民でもあるという複合的アイデンティティは、今まさしく我々日本人、韓国人、中国人に必要とされている。グローバル化の進行や経済格差の拡大、少子高齢化で日本と韓国が共有する社会的・経済的要因が不安定要因となり、政治の在り方にも影響を与えている。

先行き不安からストレス発散のため、社会のマイノリティーに嫌がらせをする事象は他国の社会にも見られ、EUという地域統合を理念にする共同体を作り上げたヨーロッパにおいても、移民排除を目的とする勢力の台頭が目立ってきている。アメリカにおいても、共和党大統領候補による移

遺骨奉還スケジュール

2015年９月			距離
11日（金）	13:00	北海道深川・浄土真宗本願寺派一乗寺集合。結団式。	209km
	夕刻	浜頓別到着。	
12日（土）	9:00	北海道枝幸郡浜頓別町　天祐寺にて追悼法要 ご遺骨をバスに乗せる（39体）	217km
	14:00	朱鞠内光顕寺「旧光顕寺・笹の墓標展示館」朱鞠内ダム工事犠牲者追悼法要（雨竜郡幌加内町朱鞠内）雨竜ダム工事犠牲者遺骨（２体）ご遺骨受け取り。	
	18:00	一乗寺到着	
13日（日）	8:00	一乗寺出発	176km
	9:30	北海道美唄常光寺にて追悼法要 三菱美唄炭鉱犠牲者の遺骨をバスに乗せる（６体）	
	13:00	本願寺札幌別院にて戦時下労務動員犠牲者追悼法要	
	17:00	本願寺札幌別院納骨堂の犠牲者遺骨をバスに乗せる（71人分１瓶） 苫小牧港　フェリー乗船	
14日（月）	15:00	茨城県大洗港着、東京へ	124km
	19:00	東京築地本願寺にて追悼法要	
15日（火）	7:00	東京築地本願寺発、京都へ	509km
	15:30	京都・西本願寺着。本山にて追弔会 終了後、京都から大阪へ	
	19:00	大阪・本願寺津村別院にて市民による追弔会	
16日（水）	9:00	大阪・本願寺津村別院出発	333km
	17:00	広島・本願寺広島別院にて市民による追弔会	
17日（木）	9:00	広島・本願寺広島別院出発	199km
	13:00	下関・本願寺光明寺追悼会	
	17:00	下関港国際ターミナル　関釜フェリーに乗船	
	19:45	下関発19:45→釜山着（18日）8:00	220km
18日（金）	8:00	釜山港	423km
	日中	韓国釜山市内追悼行事	
	夕刻	ソウル市内遺骨安置所	
19日（土）	終日	ソウル市庁前にて合同葬儀	0km
20日（日）	午前	ソウル市内にて各行事	100km
	午後	天安市・望郷の丘に納骨	
21日（月）	遺骨奉持団・現地解散 帰国		

出所：遺骨奉還委員会



安重根と千葉十七の合同法要大林寺（宮城県栗原市）
2015年９月13日　筆者撮影

遺骨返還広報ポスター



出所：遺骨奉還委員会

民排斥やイスラムに対してのヘイトスピーチととられる発言がアメリカ社会である一定の層から支持されている。このような「排除」と「偏見」そして「憎悪」に満ちた世界的な動きは、第二次世界大戦前の混沌とした世界事情と酷似しているようで不気味である。

2015年11月15日、ソウル安重根祈念館との共催で学術会議を開催した。会場である龍谷大学響都ホール交友会館で龍谷大学図書館主催の下、安重根の遺墨のレプリカが展示され、学術会議の参加者は熱心に見入っていた。龍谷大学現図書館長の安藤徹は、基調講演者のオーストラリア国立大学教授であるテッサ・モリス＝スズキの著書[22]を引用し、境界が「現代の社会では不可欠の条件のひとつ」であるからこそ、「『可能未来（future possible）』にかかわる越境的な会話を行うための断絶されていた伝達ライン」の再構築が必要なのであり、「平和への準備」のためには「多種多様な背景を持つ、そしておそらくまったく異質な政治的・社会的な視点を持つさまざまな国のさまざまな人々が、考えを共有し、対話を交わし、互いに学びあい、抑圧や暴力に対する抵抗の中で互いを支援し合うこと」で、「国境を越えたコミュニケーション・ネットワークを構築」する作業が可能になるという見通しを持つことが大切であると語った。安重根は思想家であり、哲学者である。そして現代に最も必要とされる教育観をも提言する教育者でもある。龍谷大学の建学の精神である「共生」の視点からさらに安重根が目指した『東洋平和』研究を深めたい。

注

1）菱木政晴『浄土真宗の戦争責任』岩波ブックレット、1993年。

2）山本邦彦「1920年代朝鮮における監獄教誨の一考察―勤労の強調をめぐって」佛教大学大学院紀要文学研究科篇第38号、2010年、73-88頁。

3）金潤煥「開港期釜山における東本願寺別院と地域社会（特集：国際ワークショップ海港都市国際学術シンポジウム「東アジアの海洋文化の発展：国際的ネットワークと社会変動」）『海港都市研究』６、2011年、43-57頁。

4）松金公正「真宗大谷派による台湾布教の変遷―植民地統治開始直後から台北別院の成立までの時期を中心に―」アジア・アフリカ言語文化研究、No. 71、2006年、57-111頁。松金は、柏原祐泉編『真宗史料集成第十一巻維新期の真宗』同朋舎（1983年）の「解説」７-９頁を参照している。

5）龍谷大学では『龍谷大学戦没者名簿』刊行を記念して、展観『戦争と龍谷大学』を開催した。開催日2011年10月28日～11月６日。龍谷大学では、戦没者調査室（室長：新田光子 社会学部 教授）を中心に、戦没した龍谷大学関係者（学生・教職員）の調査・研究を2009年４月から2011年10月まで実施した。また注目すべき点は、大学の社会的責任を使命として掲げ、社会へそのメッセージを発信している。龍谷大学プレスセンター、「『龍谷大学戦没者名簿』刊行・展観『戦争と龍谷大学』開催10月８日～11月６日」https://www.u-presscenter.jp/modules/bulletin/index.php?page＝article&storyid＝3429、アクセス日、2016年２月２日。

6）テッサ・モリス＝スズキ「越境する戦争の記憶」安重根「東洋平和論と日韓歴史の国境越え」龍谷大学社会科学研究所付属安重根東洋平和研究センター、安重根義士記念館主催の国際学術会議基調講演、

2015年11月７日。

7）牧野英二「「近くて遠い国」の間の対話に向けて―日本人の安重根像をめぐって」『龍谷大学社会科学研究所付属安重根東洋平和研究センター共同研究会基調講演集』（2013年４月-2014年３月活動記録）、龍谷大学社会科学研究所付属安重根東洋平和研究センター、2014年、30-47頁。

8）『驚きもの木20世紀』（おどろきもものきにじっせいき）は、1990年代にテレビ朝日系列で放送された朝日放送（ABC）制作の教養ドキュメンタリー番組。制作局の朝日放送（ABC）では1993年４月16日から1999年10月１日まで毎週金曜21:00 - 21:54（JST）に放送された。Wikipediaより。

9）斎藤充功は、『伊藤博文を撃った男 革命義士安重根の原像』時事通信社、1994年のち中公文庫を刊行したノンフィクション作家。

10）佐木隆三『伊藤博文と安重根』1996年、文藝春秋。

11）龍谷大学社会科学研究所付属安重根東洋平和研究センターニュースレターNo. 2、2015年、２頁。

12）戸塚悦朗「最終講義に代えて―「韓国併合100年の原点を振り返る―」1905年、「韓国保護条約(?)は担造されたのか」龍谷法学42巻３号、2010年、311-336頁。

13）戸塚悦郎「龍谷大学における安重根東洋平和論研究の歩み　100年の眠りからさめた遺墨(上)(下)」『龍谷大学社会科学研究年報』44、2014年、57-78頁。

14）この安重根の直筆の遺墨三幅ほか関係資料は、1997年６月、岡山県笠岡市にある浄土真宗本願寺派の浄心寺から寄託を受け、龍谷大学が貴重図書として深草図書館特別書庫に保管されている。

15）「安重根の獄中遺墨、龍大に寄託「日韓史考えるきっかけに」」『京都新聞』2015年11月17日付。

16）朝日新聞シンポジウム「歴史和解のために」、基調講演ジモーネ・レシッヒ「独仏教科書半世紀かけ」、2008年４月19日。

17）駐仙台総領事館HPからhttp://jpn-sendai.mofa.go.kr/worldlanguage/asia/jpn-sendai/mission/greetings/index.jsp　2015年10月１日アクセス。

18）筆者による聞き取り調査から。2015年９月13日。

19）「「安重根追慕巡礼」寺下さんに同行、18歳の韓国青年」WoW! Korea、2010年３月16日配信　http://www.wowkorea.jp/news/korea/2010/0221/10067894.html　2016年２月３日アクセス。「安重根を追悼し徒歩巡礼、寺下武さんがあす韓国到着」http://www.wowkorea.jp/news/korea/2010/0316/10068676.html

20）殿平善彦　浄土真宗本願寺派一乗寺住職の遺骨にかけた思い―東アジアに新たな和解と友情の時代「強制連行犠牲者遺骨返還事業」、殿平善彦、浄土真宗本願寺派一乗寺住職、空知民衆史講座代表、強制連行・強制労働犠牲者を考える北海道フォーラム共同代表、2005年から韓国「日帝強占下強制動員被害真相糾明委員会」海外諸問委員。1976年から北海道におけるタコ部屋労働者、朝鮮人強制労働犠牲者の調査と遺骨発掘に取り組む。1997年朱鞠内で日韓（のち東アジアと改称）共同ワークショップを開催。2003年より本願寺札幌別院の強制労働犠牲者遺骨調査をはじめ、猿払村での遺骨発掘などに取り組んでいた。

21）殿平善彦「強制連行犠牲者と歴史和解―犠牲者の遺骨問題と生死をめぐる浄土真宗の課題」『龍谷大学社会科学研究所付属安重根東洋平和研究センター共同研究会基調講演集』（2013年４月-2014年３月活動記録）、龍谷大学社会科学研究所付属安重根東洋平和研究センター、2014年、４-29頁。

22）テッサ・モリス＝スズキ『過去は死なない―メディア・記憶・歴史』岩波書店、2014年。